Agora
No. 23
2015. 3. 31. 発行　一橋大学大学教育研究開発センター

「すべて」が真になる日まで

筒井　泉雄　（大学教育研究開発センター長）

「全は一、一は全」通りすがりの主婦が、幼い兄弟に問うたのは、ブール代数的に真（True）です。けれど、文部科学省が大学や教育機関に問うている「全（すべて）」は本当に真でしょうか？すこし、これについて考えてみます。

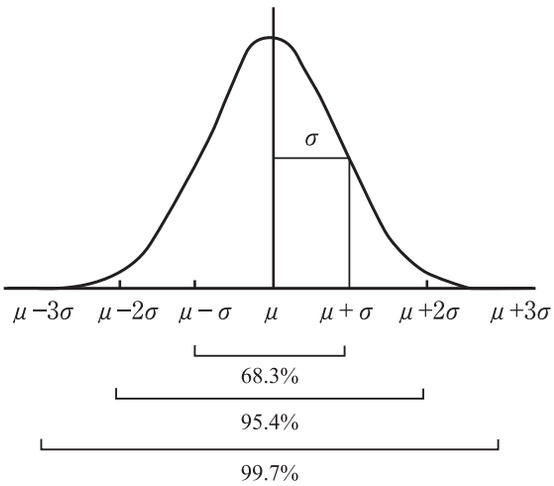
中央教育審議会（中教審）は昨年末、大学入試センター試験に代わって、新共通試験を導入するよう下村博文文部科学相に答申。答申をうけた下村大臣は、即下に「答申が『絵に描いた餅』にならないよう速やかに改革に取り組む」と述べています。

そもそも、一期校二期校の大学独自の試験制度から、失敗した共通一次テストをへて、「すべて」の受験生に対して提供されているのが現行大学入試センター試験です。理想として、バカロレア方式（大学の完全序列化、学生の質によって大学を変更可能という受け皿）をめざすも挫折し、大学の序列化を推し進めた結果だけが残っています。

中教審答申は現行の入試の知識偏重を改め、能力を多面的に評価する手法に改革し、大学の個別試験も面接や小論文などによる選抜に変え、多面的評価で脱「知識偏重」をめざすことを求めています。答申では、高校生の学習到達度を確認するため、「すべて」の高校 2、3 年生に向けて学力を測る「高等学校基礎学力テスト（仮称）」を 2019 年度から導入する考えを示しています。テスト結果は、受験時の調査書の資料として大学側に提出することも想定していますが、合否判定には直接利用しないよう求めています。当然、大学は独自の足切の基準を求めて、また学生は課せられて、文部科学大臣が速やかな改革を行っても、入試が改善されないことがすでに見え隠れしています。大学は複雑な選抜方法を考えなくてはいけなくなり、高校は複数テストを用意する必要があり、「高校と大学の負担増は避けられない（松本亮三・東海大教授）」構図になっています。学生の学力強化とグローバル化を進める大学に更なる負荷がかかることは言うまでもありません。「すべて」に対して意図された企画が、よき未来を導き出す構図はここには見えていません。ここに在る問題は「すべて」の実践です。今一度、「すべて」≠改善、ということを意識して、「すべて」を対象範囲とする考え方を、考え直す必要があると思われます。受け皿を用意することなく「すべて」を一度に判定しようという実践ありきの改革から発生した壮大な 36 余年の実験結果を踏まえ、今進められようとしている入試改革が入試改善であるかを真剣に考え直すべきだと思われます。自明ですが改革≠改善、です。

また、現実、学生が接しているもう 1 つの「すべて」にかかわる問題が、あります。

文部科学省は 2011 年度から初等中等教育に向け「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」として、7 億 6 千万の予算をつけました。趣旨は、「「すべて」の子どもたちに必要な学力を身に付けさせることは公教育の重要な責務である。本事業においては、子どもたちに必要とされる学力を育成するため、実践的な調査研究を実施する」となっています。学力とは何でしょう？「すべて」の、とはどこに線を引くことでしょう？文部科学省は本気で、「すべて（100%）」と言っているのでしょうか？少し自然と戯れてから施策を練る必要を感じます。学校の成績を含め（異論は多々ありますが）、自然現象、実験計測、社会現象は誤差やばらつきを含み、多くが（意図的な操作がない限り）図（次ページ）のような正規分布で表現可能です。単純モデルですが、正規分布を用いて「すべて」の子供たち（小中高大学）集団の成績について考えてみます。理想の分布ですが、成績平均 μ=50 点、標準偏差 σ=16.7 点とします。ここから、「すべて」の子供たちに必要な学力の育成が意味するところを見てみます。「すべて」の子供の範囲は μ-3σ までとなり、μ-3σ の成績は 0 点です。これは決して合格の〇ではありません。文部科学省の意図する教育、「すべて」の子供の範囲がこの寓意とイコールでないことを祈りますが、「すべて」という呪文を口にする



ことによって、発言者は実現のための努力という呪詛を背負うことになります。おおよそを本学の成績と重ねてみます。$\mu+2\delta$ 以上を A、$\mu+\delta$ ～ $\mu+2\delta$ を B、μ ～ $\mu+\delta$ を C、$\mu-\delta$ ～ μ を D とすると、$\mu-\delta$ 以下は F です。この 0 ～ $\mu-\delta$ の学力を最低 $\mu-\delta$ まで持っていくことが、暗黙に求められていることになります。0 ～の道のり、成績アップの道のりが、どれくらい大変かは、教育者のよく知るところであり、苦労しているところでもあるでしょう。

この零 (0) からの教育が高校までの教育に求められる呪詛だと思いたいのが本音ですが、昨今、この呪詛は大学にも蔓延してきていると感じざるを得ない場面が多々あります。学生への教育質保証と文部科学省が言っているのはこの「すべて」の変形であり、前半で述べたようにまず「すべて」ありきの、「すべて」に通じるものだと感じざるを得ない状況です。「大学の理念、機能、構造の自主性」に反して、大学への文部科学省の指導は日々強まっています。しかし、大学は一種の「篩」として働くことが必要で、加えられる砂は学生でなければならないと思っています。エラトステネスの篩のように「素」として生き残っていく学生を如何に多く生み出すか、学生にいかに「素」となるよう指導していくか、が高等教育であり大学に問われていることではないでしょうか。

いま改めて、教育に求められていることは、天の声抜きで「全は一」という命題の答えを出すことだと感じています。

案内と報告

出版物のご案内（2011 年 10 月～2015 年 3 月）

■2011 年 11 月 30 日　全学 FD シンポジウム報告書第 15 号
■2012 年　3 月　1 日　教員用授業ハンドブック　2012 年度版
■2012 年　3 月 30 日　大学教育研究開発センター 2011 年度年報
■2012 年　3 月 31 日　人文自然研究　6 号
■2012 年　6 月　1 日　全学 FD シンポジウム報告書第 16 号
■2012 年 11 月 30 日　全学 FD シンポジウム報告書第 17 号
■2013 年　3 月　1 日　教員用授業ハンドブック　2013 年度版
■2013 年　3 月 29 日　大学教育研究開発センター 2012 年度年報
■2013 年　3 月 31 日　人文自然研究　7 号
■2013 年　6 月　3 日　全学 FD シンポジウム報告書第 18 号
■2014 年　3 月　1 日　教員用授業ハンドブック　2014 年度版
■2014 年　3 月 31 日　人文自然研究　8 号
■2014 年　5 月 30 日　大学教育研究開発センター 2013 年度年報
■2015 年　3 月　1 日　教員用授業ハンドブック　2015 年度版
■2015 年　3 月 31 日　大学教育研究開発センター 2014 年度年報
■2015 年　3 月 31 日　人文自然研究　9 号

大学教育研究開発センター日誌

2012 年 4 月～2013 年 3 月

1．学内会議、研修、研究会

■教育力開発プロジェクト

7 月

■2012 年度第 1 回全学 FD シンポジウム
「能動的教育手法への挑戦 —heuristic な学習経験のために」

1 月

■2012 年度第 2 回全学 FD シンポジウム
「男女共同参画と大学教育」

2．学外視察・調査、発表、会議などへの参加

視察・調査

9 月

■Ministry of Science and Higher Education, National Contact Point for Research Programmes of the European Union, Jagiellonian University, University of Groningen, University of Rzeszów

発表・講演

9 月

■Development of the didactic potential of Rzeszów University on a European Level (University of Rzeszów)
"Quality Assurance, Tuning, and Grading in the Age of Internationalization"

11 月

■平成 24 年度大学マネジメントセミナー
「一橋大学における GPA 管理」

会議などへの参加

5 月

■平成 24 年度国立大学教養教育実施組織会議及び協議会（千葉大学･三井ガーデンホテル千葉）

8 月

■平成 24 年度全国大学教育研究センター等協議会（愛媛大学）

10 月

■日本教育学会第 64 回大会（東京学芸大学）
「教育政策における『非決定』の政策過程 —マンパワー政策の行き詰まりを事例として」

■大学史研究会第 35 回研究セミナー（横浜市立大学）

■科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム（京都国際会館）
「21 世紀の大学の役割」

3 月

■第 19 回大学教育研究フォーラム（京都大学）

■上海外国語大学・一橋大学合同ゼミナール（上海外国語大学）

3．会議などの開催

6 月

■Ageta Pierścieniak 博士（University of Rzeszów）による研究会
"Human Resource Management in Different Organizational Settings"

9 月

■Hendrik Ferdinande 博士 (Ghent University) による講演会
"Bologna Process and Tuning"

2013 年 4 月～ 2014 年 3 月

1．学内会議、研修、研究会

■教育力開発プロジェクト

11 月

■2013 年度全学 FD/SD シンポジウム
「求められる研究者の倫理とは何か？—米国の大学における研究倫理（Research Ethics）と研究審査委員会（Institutional Review Board）」

2．学外視察・調査、発表、会議などへの参加

視察・調査

3 月

■平成 25 年度海外語学留学（試行）視察
オックスフォード大学、シェフィールド大学

発表・講演

7 月

■電気通信大学 FD 研修会（電気通信大学）
「GPA、IR、チューニングの相互作用による学習と教育力の向上」

8 月

■大学改革フォーラム（明治大学）
「学士課程のカリキュラム」

■第 63 回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会（福島大学・福島ビューホテル）
「GPA と IR：一橋大学の事例から」

9 月

■静岡大学夏季 FD 講演会（静岡大学）
「GPA 制度と成績評価」

会議などへの参加

5 月

■平成 25 年度国立大学教養教育実施組織会議及び協議会（熊本大学・メルパルク熊本）

6 月

■日本高等教育学会第 17 回大会（広島大学）

8月

■第６回日中高等教育フォーラム（同志社大学）
「高等教育改革と人材流動化政策
―EU 枠組みの中国と日本のインパクト」

9月

■平成 25 年度全国大学教育研究センター等協議会（金沢大学）

3．会議などの開催

10 月

■第２回チューニング国際シンポジウム
「Tuning Educational Structure in Europe, Asia and the World（チューニングによるグローバル産学官連携）」

2014 年 4 月～ 2015 年 3 月

1．学内会議、研修、研究会

■教育力開発プロジェクト

1月

■2014 年度全学 FD シンポジウム
「教育プロジェクト成果報告会―2012・2013 年度採択分―」

2．学外視察・調査、発表、会議などへの参加

視察・調査

8月・9月

■平成 26 年度海外語学研修視察
アーヘン語学アカデミー

9月

■平成 26 年度海外語学留学（試行）視察
ニュージーランド教育機関

発表・講演

11 月

■GPA（Grade Point Average）に関する研究会（京都大学）

会議などへの参加

5月

■平成 26 年度国立大学教養教育実施組織会議及び協議会（京都大学・京都ブライトンホテル）

6月

■日本高等教育学会第 17 回大会（大阪大学）

7月

■第 37 回言語教授法・カリキュラム開発研究会（甲南大学）

9月

■平成 26 年度全国大学教育研究センター等協議会（琉球大学）

センター所属スタッフ

■センター教員

筒井　泉雄　（センター長）
朴澤　泰男　（専任講師）

■センター事務（教務課）

奥山　孝子　（教務課主査）
馬場　　翠　（教務課職員）
高山　　静　（非常勤職員）
我妻　みほ　（非常勤職員）
中根　由子　（非常勤職員）
生田　　泉　（非常勤職員）

■センター助手（全学共通教育担当）

中村　　宏　（大学教育研究開発センター）
福田　明子　（語学ラボラトリー）
小林美穂子　（理科）
朝羽　温子　（運動文化）
鈴木奈緒美　（語学教育）
菊池美紀子　（語学教育）
大平千江美　（数学・統計）

Agora　第 23 号　2015 年 3 月 31 日発行
■発行　一橋大学大学教育研究開発センター　■編集　センターニュース「Agora」編集委員会
■住所　〒186-8601　東京都国立市中２－１　■URL　http://www.rdche.hit-u.ac.jp